

画を
描くのは
楽しい
それは
生きる
喜びでも
ある



アフロディア

石正美術館 ミュージアムニュース
SEKISHO ART MUSEUM
MUSEUM NEWS
Spring 2017

No. 132

◆石本正記念展示室◆「石本正作品選Ⅰ」より

「石本正作品選」では、青年時代から晩年に至るまでの画業の全貌を、展示作品を年四回に分けて入れ替えながら紹介します。収蔵作品の中から選び抜かれた名作の数々を、ぜひ会場でご覧下さい。

華麗さを増す美の表現 （舞妓から裸婦・花へ）

一九七〇年代に入ってから、花や風景、舞妓ではない裸婦をテーマにした作品を描くようになった石本。特に女性表現は円熟期を迎え、妖艶で神秘的な表情に深みが増しました。典型的な日本人女性とも言える体型の昭和三十年代の作品に比べ、等身が高く手足の長い女性として描かれるようになり、白く輝く肌の美しさもこの頃から際立つようになりました。その理由として考えられるのが、一九

六四年にイタリアへ初めての海外旅行をしたことを機に、中世ヨーロッパ美術へ直接触れる機会を得たことです。中でも、フレスコ画の現物は彼に大きな衝撃を与えました。これまで目にしてきた印刷物とは全く異なる繊細な発色と表現。そして、日本古来の美術にも通じる造形美や精神性に打たれた彼は、この文化に直に触れることは、今後の日本美術を考える上で非常に有意義であると考えました。五年の歳月をかけ計画された緻密なスケジュールに基づき、学生や卒業生を連れて最大八十日間にもおよぶヨーロッパ美術研修旅行を計十二

する作品の一つです。

イメージのもとになっているのは、画家が大好きなポツティチェルリの『春』。その中央に描かれた三美神の薄物をまとった肌には、石本がヌードを描き続けながら長年願ひ続けた肌の表現がありました。光と影の関係ではとても捉えることのできない、微妙な色の変化をもつ薄物を通して見える素肌。彼は、自分の描く女性像をポツティチェルリの領域まで至らせたいと念じ、生涯女性美を追求し続けました。

また花には、女性の姿や小説の一場面などのイメージが重ねられ、「女体美に限りない目を向けてきた石本の露をすつて開いた花々」と全国紙で紹介されました。

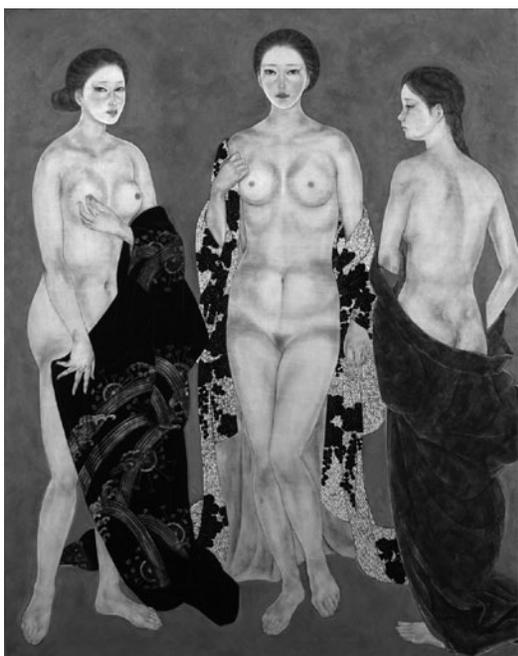
ある時画家は、教鞭をとる京都造形芸術大学の学生と一緒に菊を写生しました。この菊は出来そこないの小さな花でしたが、画家にはとても美しく大きく見え、ウンベルト・エーコ（一九三二～二〇一六）原作の映画『薔薇の名前』に出てくる重苦しい雲の空や陰鬱な僧院を重ね合わせながら、二日で十枚のスケッチを描き上げました。



「寂光」一九九四（平成六）年

それをもとにして生まれた「寂光」は、同時に平家物語のイメージも重ねられています。上部の赤い菊の花は滅びゆく平家の若宮の武者を、薔つばきの点々は雑兵を思い浮かべながら描かれており、「平家琵琶に謡われる耳無芳一の話に出てくる寂光からとって題名を付けた」と画家は語りました。こうして東西の物語のイメージが空想の中で混ざり合い、生命の儚さと消え去る間際の一瞬の輝きを表現した花の名作が誕生しました。

このほかにも、青年時代から晩年に至るまで、初公開の作品を含めた三十四点を展示しています。美への感動と共に生きた画家が描いた名作の数々をぜひ会場でご覧ください。



「三人の女」一九八〇（昭和五十五年）

術研修旅行を行いました。こうして何度も本物を目にする内に、感動が心の奥に息づき、自身の作品として一層のびやかで華麗な石本芸術が花開いていったと考えられます。白く輝く肌の表現が冴えわたる「三人の女」も、そんな女性表現の円熟を象徴

◆企画展示室◆ 石本正素描展 「対象へのまなざし」

石本芸術の源でもある素描。画家が残した何千枚にも及ぶ素描・スケッチブックの中から、初公開のものも多数含め四十八点の作品を紹介しています。

初公開

石本正のスケッチブック

石本画伯が亡くなった後、彼が最期まで手元に置いていたスケッチやデッサンがアトリエから数多く見つかりました。

そんな中、彼の作画姿勢を説明する上で重要な発見がありました。それは何十冊もの古いスケッチブックです。経年により表紙も中もボロボロに傷んだものばかりで、ほとんどのページが表も裏も使われていました。描かれた対象は鳥や動物、風景、裸婦など様々で、年代はだいたい昭和二十年代後半から四十年代の頃のものではないかと推測されます。

実はこれまで、この年代のデッサンがほとんど見つかっていませんでした。そのため、当時の本画作品に多く描かれていた鳥や風景が、どのような取材（デッサン）をもとに描かれたのかが一切不明でした。

これらスケッチブックには、細部まで克明に描かれたものはほとんどなく、スピード感のある筆致で対象の動きや骨格の流れなどを瞬時につかむような、クロッキー的なものが中心となっていました。中には同じ対象で一冊うめつくされているものもあり、動く対象から片時も目を離さず、ものの本質をとらえようとする画家の鋭い視線が感じられるものば

かりでした。こういったスケッチをもとに、生き生きとした鳥や風景の代表作が生まれたようです。

これらスケッチブックは、彼にとつて《スケッチ》や《デッサン》というものが本画を描く為の下描きのものではなく、また、他者に見せるためのものでもなく、その時に目に映ったもの、その時に感動したものを心にうつし取り自分のものにするための、作画における大切なプロセスであることがうかがえる貴重な資料です。

今回は、そのうちの十七冊を初公開しています。



美しき女たち

無限の変化を追って

石本は、絵を描くことの全ての要素がヌードデッサンにあると語り、若い頃から描き続けてきました。「ヌードデッサンを通して、対象の比例、コントラストやアクセント、動きや流れ、さらには木炭や鉛筆で描きながら色彩をも感じさせるようなことなど、絵を描くことにおいてもっとも大事なことを的確につかむことができる」というのが彼の信念でした。

ヌードデッサンで画家が好んで使っていた紙は、木炭や鉛筆の筆跡が残りにくい、表面のなめらかなケント紙などが中心でした。この紙の特長を活かし、鉛筆や木炭を指や布などでこすり付けた濃淡と、必要最低限の線によって女性たちの肌の質感を追求しており、ほぼモノトーンであるにもかかわらず肌の色合いまでも感じさせるようなデッサンとなっています。

女を「美」の最たるものとしてとらえ、それを生涯求め続けた画家が生み出した作品の真髄ともいえるのが、こうしたヌードデッサンの数々なのです。

ぜひ会場で裸婦や花など多くの対象に注ぐ画家のまなざしをご覧ください。



◆「石本正作品選1」（石本正記念展示室）
◆石本正素描展「対象へのまなざし」（企画展示室）

【会期】六月十一日（日）まで

「新たな一歩」

「没後一年回顧展を終えて」

石本先生が亡くなられて一年の節目として開催していた没後一年回顧展「石本正 魂の軌跡」が、三月十二日に無事に閉幕しました。前後期に分けたとはいえ、約六ヶ月間という長期間に渡ってひとつの展覧会を開催したのは、実はこの石正美術館にとって初めての事でした。しかし今改めて振り返ってみると本当にそんなに長かったのだろうかと思ってしまうほどに、あつという間に終わってしまったような気がしています。

思えばこの展覧会が、石本先生の若い頃から人生の結末までの生涯すべてを一気に紹介するものであったこと自体、これまでになかった内容でもありました。

もちろん石正美術館が十六年間ずっと石本先生の作品を展示し、その画業を紹介し続けてきたことに変わりはありません。ただしこれまでは、様々なテーマに沿って収蔵作品を紹介しつつ、絵を描き続ける石本先生の「今」の姿につながるよう常に現在進行形を保ちながら、絵に対する想いや姿勢など先

生の《主観》を前面に出して展覧会を構成していました。そのため、その時のテーマによっては、ある偏った時期の作品だけで構成された展覧会という場合も多くありました。この事はもしかしたら、元気でいてくださる先生の存在に甘えていればよかった、という言葉に言い換えられてしまうのかもしれませんが。

それが、先生の人生が二〇一五年に終わりを迎えたことで、展覧会の内容にも「結末」を留意しなくてはならなくなりました。そのため、これまでとはすこし違う客観的な視点で先生の画業を見直すという作業が必要になってきました。こうして改めて生涯をたどる展覧会となった「没後一年回顧展」は、石正美術館にとって大きな節目となったように感じています。

この回顧展を終えての新たな一歩として、この春から美術館の中でひとつ変えたことがあります。それは、展示室の名称です。これまで《本館展示室》と呼んでいた場所は《石本正記念展示室》、そして《新館展示室》は《企画展示室》となり、各展示方針も少し変えることになりました。



現在の企画展示室の様子（石本正素描展「対象へのまなざし」）

《企画展示室》の方は、年四回の展覧会のうち二回は必ず石本正のデッサン（素描）展を開催することになりました。これは、絵を描く上でデッサンする事をとても大切にしていただいた先生が生前、それらを常設展示するための「デッサン館」を創りたいという願いを持っておられたためです。その上で、今まで通り、ゆかりのある画家の展覧会などの企画展を行っていきます。

そして《石本正記念展示室》は、年四回の展示替えをしながらいつでも石本正の作品を鑑賞できること自体は変わらないのですが、今後は常に「石本



展示室入口に新しく表示がつけました

正の若い頃から晩年までの生涯の全て」を代表作と共に紹介するための展覧会を行っていく方針です。これは、全国で唯一「画家・石本正」のことを深く知ることの出来る美術館として、しっかり腰を据えてその人物像を正しく世に伝えていくためです。

今後は、先生の遺品などからもたくさん新たな発見があるだろうと思っています。石本正についての研究の道は、まだまだこれからです。その都度、ご紹介していきたいと思っていますので、どうぞこれからも石正美術館での展覧会を楽しみにしてください。

（学芸員 横山由美子）

◆活動報告◆「第52回石本正絵画教室」

三月四日(土)・五日(日)に、「第五十二回石本正絵画教室」裸婦デッサン会がありました。県内外より十七名の方々にご参加いただき、今回は「没後一年回顧展の軌跡」後期展の開催中ということもあり、初日の午前中には石本先生の画業を振り返る美術講座も開催しました。

特別講師には、京都市立芸術大学において石本先生に師事された日本画家・池田知嘉子先生(創画会准会員)にお越しいただきました。

モデルのポーズに感動した時の気持ちを大事にすること。肌の陰影を追うことよりも「いま目の前にいる一人の人間として描く」ことの大切さなどをお話した。



講評会でデッサンを前にお話される池田 知嘉子先生(右から2番目)

できました。

裸婦デッサン会では、毎回素晴らしいモデルさんとの出会いがありますが、今回も素敵な方にお越しいただきました。すつと通った鼻筋と輝く白い肌、指の先まで神経を行き届かせた繊細なポーズの連続に魅了されっぱなしで、あつという間に時間が過ぎていきました。ポーズが変わるごとに、参加者の皆様の間から感嘆のため息が聞こえ、「絵をかくよるこび」で教室中が満ちあふれた二日間でした。

今年度も石正美術館では、感動する心の大切さを伝える「石本正絵画教室」を開催します。次回は夏頃を予定しています。正式な日程が決まり次第、ミュージアムニュースやホームページ等でお知らせします。どうぞお楽しみに！



牡丹リポート つぼみを切りました

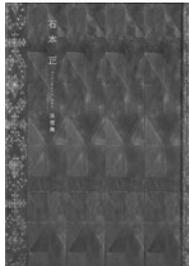
京都の「無二荘牡丹園」から移植した牡丹の木々に、たくさんつぼみがつきました。今年は移植してすぐなので、木の生命力を守るため、先日涙を飲んでつぼみを切る作業を行いました。後で数えてみたら、なんと六十二個！子孫を残そうとする植物の生命力に、ただただ驚くばかりです。切ったあとは「痛い痛い飛んでけ」とばかりに、辻尾さんから頂いた黒い液体《キニヌール》を塗っておきました。

おとしボランティアの方々と一緒に植えた牡丹もたくさんつぼみをつけています。こちらは去年よりは多めにつぼみを残したので、四月末から五月初頃には美しい姿が楽しめると思います。頑張ってる牡丹たちの姿を、見に来てあげてください。



「石本正追想集」刊行のお知らせ

このたび、石本正先生の追想集を刊行いたしました。絵を描くことを心から愛した画伯の姿や、多くの人々に慕われるお人柄が、五十一名のご寄稿者それぞれのお言葉で綴られ、とても読み応えのある内容となっております。これを機に、一人でも多くの方に石本画伯の素晴らしさを知っていただきたいと思えます。



ミュージアムショップ・通信販売にて取扱中
(お問合せ)
浜田市立石正美術館
TEL 0855-32-4388

「石本正追想集」A5判 189ページ
頒布価格 1,500円(税込)
発行 浜田市立石正美術館



石本先生とご縁のあった皆様よりお寄せ頂いた思い出とともに、2009年に行われた石本先生と哲学者・梅原猛先生との対談文を特別掲載。その他一部作品、ポートレート、絶筆「舞妓(未完)」をカラー収録。

【ご掲載者】(順不同、敬称略)
梅原猛 / 金多潔 / 富山秀男 / 芳賀徹 / 成川賢 / 浅木正勝 / 布垣豊 / 宇津徹男 / 清谷祐二
<日本画家>
池庄司淳 / 池田知嘉子 / 伊藤はるみ / 岩井弘 / 上野富二郎 / 内海福博 / 島頭尾精 / 奥村美佳 / 落合浩子 / 梶岡百江 / 桑野むつ子 / 小嶋悠司 / 小西達子 / 佐伯浩 / 坂井昇 / 庄田達生 / 城野奈英子 / 竹内浩一 / 多留裕二 / 中原麻貴 / 中村文子 / 西野陽一 / 西久松吉雄 / 橋本龍美 / 八田哲 / 林潤一 / 藤本直司 / 牧野良美 / 松倉茂比古 / 三輪晃久 / 森田りえ子 / 安田育代 / 山田伸 / 吉川弘 / 吉村和起

辻尾仁郎 / 太田紀美 / 榎木千寿 / 高島博明 / 高島由記子 / 長曾我部誠 / 澤木祐子 / 平坂常弘

ギャラリー

音羽キミ作品展

～元気でいきいき七十歳からの挑戦～

4.22 土 → 5.7 日 9時～17時 月曜休館 入場無料 ※最終日は15時まで



70歳から日本画を始めて10年を迎える音羽キミさん(山口県在住)。当館主催の「石本正絵画教室」で石本先生と一緒にスケッチした石見の風景や、日本画の大作、当地の伝統工芸品・石州和紙を使った作品などを展示します。80歳を迎えたキミさんの10年間の創作の歩みをどうぞご覧ください。

「海眺み春のきざし」(唐音海岸)

ギャラリー

平成28年度 石正美術館絵画教室作品展

【前期】石本正絵画教室・特別美術講座 洋画教室・初めての日本画

5.13 土 → 5.26 金 9時～17時 月曜休館 入場無料
【後期】日本画教室 5.27 土 → 6.11 日 ※各最終日は15時まで



昨年度、当館で開催した絵画教室受講生の作品展を行います。絵を描くよろこびに満ちた作品の数々をぜひ会場でご鑑賞ください。

石正美術館の ゴールデンウィーク



GWの石正美術館では楽しい創作教室をご用意！大人も子どももいっしょにモノづくりを楽しもう！

「音羽キミ作品展」関連ワークショップ 石州和紙を使ったかんたん白黒版画

講師：河村よし子先生(日本版画会会員)

4.30 日 13時～15時 参加費 700円 定員20名(要予約)

キミさんのかんたん版画作品



ハサミで紙や糸などを切って貼ってA4サイズの版画をつくります。楮(こうぞ)と三桮(みつまた)2種類の石州和紙で制作します。事前にどんなデザインにしたいか考えてきてくださいね。(小学4年生以下保護者同伴)

ねんど de デコ！ ～オムライスとアイスのマグネット～

講師：琴野和世先生(アトリエカロス)

5.3 水・祝 13時～15時 参加費 各400円(セットで700円) 定員各20名(予約可)



軽量粘土や樹脂粘土で作った食べ物や、お皿に見立てたマグネットの上に盛り付けます。しっかり作れる「オムライス」と、カンタンお手軽な「アイスクリーム」のどちらか選んで作れます。

石州和紙で こいのぼりをつくろう

5.5 金・祝 13時～15時 参加費 300円

GW恒例、毎年人気のワークショップです。石州和紙を使って、自分だけの可愛いこいのぼりを作りましょう。



コンサート

きん ゆり 金 悠里 ピアノ&トークコンサート

5.6 土 14時～15時(開場13:30) 入場無料

ロシアにピアノ留学中の金悠里さん(出雲市出身)によるクラシックコンサートです。才能あふれる若きピアニストの演奏をどうぞお楽しみください。



【演奏曲目】(予定) シューマン作曲「幻想小曲集」作品12(第1曲夕べに、第2曲飛翔、第3曲なぜ、第4曲気まぐれ、第5曲夜に、第6曲寓話、第7曲夢のもつれ、第8曲歌の終わり)他。

《プロフィール》

1995年 島根県出雲市生まれ。 塩冶小学校、出雲第二中学校を卒業後、桐朋女子高等学校音楽科をピアノ科首席で卒業。 桐朋学園大学音楽学部「ソリストディプロマコース」を経て、現在チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院に留学中。

ヤマハ銀座コンサートサロン、調布市せんがわ劇場、大阪フェリーチェホール、ビッグハート出雲「白のホール」でリサイタルを行う。またオランダ、スペインにおいてソロコンサートに出演し好評を得る。みなとみらいホールにてNHK交響楽団メンバーによる弦楽五重奏団と共演。フランスとドイツ、ポーランドにてマスタークラス受講、選抜コンサートに抜擢される。モスクワ音楽院主催による「若き才能達によるコンサート」に選抜され、ポリショイザール(大ホール)で演奏。

これまでピアノを川上義枝、古川浩美、中西利果子、住田智子、朴久玲及びM.ヴォスクレセンスキーの各氏に師事。現在モスクワにてセルゲイ・ドレンスキー氏に師事。

SCHEDULE 石正美術館スケジュール

石本正 記念展示室	企画展示室	ギャラリー 【入場無料】	ミュージアムパフォーマンス・創作教室
石本正作品選Ⅰ	石本正素描展 「対象へのまなざし」	4.22 土 音羽キミ作品展 ～元気でいきいき七十歳からの挑戦～ ↓ 5.7 日 主催：音羽キミさん 最終日 5.7 は 15 時まで	4.30 日 「石州和紙を使った かんたん白黒版画」 13 時～ 15 時 講師：河村よし子先生（日本版画会 会員） 参加費 要申込み
		5.13 土 平成 28 年度 石正美術館絵画教室 作品展【前期】 ↓ 5.26 金 石本正絵画教室・特別美術講座 洋画教室・初めての日本画 最終日 5.26 は 15 時まで	5.3 水・祝 ねんど de デコ！ ～オムライスと アイスのマグネット～ 13 時～ 15 時 講師：琴野和世（アトリエカロス） 参加費 要申込み
		5.27 土 平成 28 年度 石正美術館絵画教室 作品展【後期】 ↓ 6.11 日 日本画教室 最終日 6.11 は 15 時まで	5.5 金・祝 「石州和紙で こいのぼりをつくろう」 13 時～ 15 時 参加費 要申込み
3.25 土 ↓ 6.11 日	3.25 土 ↓ 6.11 日		5.6 土 金 悠里 14 時～ 15 時 ピアノ & トークコンサート 入場 無料

6.12 月 → 6.30 金 展示替休館 CLOSED

石本正作品選Ⅱ	第7回 石州和紙に 描いた日本画展	7.1 土 ↓ 7.21 金 未定
		7.22 土 鐘築等 ↓ 8.6 日 「の・ような似顔絵店4」 主催：鐘築等さん 最終日 8.6 は 15 時まで
		8.9 水 二科会写真展（仮） ↓ 8.13 日 主催：二科会写真部島根支部 最終日 8.13 は 15 時まで
7.1 土 ↓ 10.9 祝	7.1 土 ↓ 8.20 日	

【6/12（月）～30（金）】
19 日間の休館について

今年の 6 月の展示替え休館では【収蔵庫内の
くんじょう
燻蒸】を行うため、いつもより長く休館します。
燻蒸とは、作品を大切に保管するために収蔵
庫内の害虫を駆除する作業のことです。殺虫
効果のあるガスは人体にも影響しますので、
安全に作業を進めるため一定期間の休館を必
要とします。
皆様にはご迷惑をおかけしま
すが、ご理解下さいますよう
お願いいたします。



4

5

6

7

7



SEKISHO ART MUSEUM

利用ごあんない

開館時間 9:00~17:00

休館日 月曜日

(月曜日が祝日の場合開館・翌日休館)

展示替え期間

(平成29年6月12日(月)~6月30日(金))

観覧料 展覧会によって異なります。

展覧会情報ページにてご確認ください。

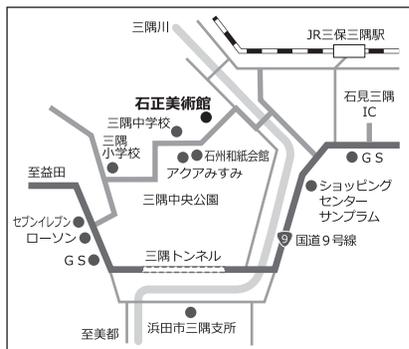
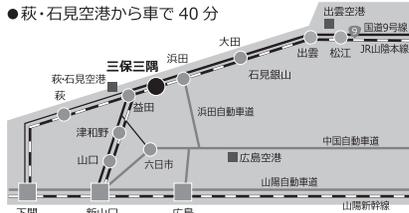
※20名以上は団体料金。

※身体障がい者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方は半額。介助者は無料です。

※「しほね家庭の日」毎月第3日曜日は「しほね家庭の日」(家族連れの高校生・中学生・小学生は無料)。

石正美術館へのアクセス

- 最寄駅 三保三隅駅から車で5分
- JR山陰本線 浜田駅から三保三隅駅まで列車で20分
- 広島駅から浜田駅まで高速バスで2時間
- 浜田自動車道 浜田ICから車で20分
- 山陰道 石見三隅ICから車で3分
- 秋・石見空港から車で40分



石正美術館 ミュージアムニュース

アフロディア

No.132

Spring 2017

平成29(2017)年4月21日発行

編集・発行 浜田市立石正美術館

〒699-3225 島根県浜田市三隅町古市場 589

TEL 0855-32-4388 FAX 0855-32-4389

Eメール sekisho@mx.miracle.ne.jp

http://www.sekisho-art-museum.jp/

石正美術館 検索

「浜田市立石正美術館」で検索



今回は岡山県の美術館などを巡り作品を鑑賞するとともに、地方のミュージアムのあり方を学びたいと思います。

この旅行はサポーター以外の方も参加することができ、お誘いあわせの上お申し込みください。詳しくは美術館までお問い合わせください。

申し込み〆切 5月31日(水)

定員18名(最少催行人数16名)

※人数に達しない場合は中止させていただきます

サポーター研修旅行

のごあんない

6月17日(土) 日帰り
参加費16,000円

※バス代・食事代・入館料・保険料を含む
※バス料金高騰の為、参加費が例年より高くなっております。ご了承ください。

主な見学予定地

倉敷市立美術館

「池田遥郵名作選」(後期)

池田遥郵は、戦後の京都画壇を代表する日本画家の一人です。京都市立絵画専門学校(現在の京都市立芸術大学)に学び、戦前の帝展(帝国美術院展)、戦後の日展で活躍。日展の役員や芸術院会員などを歴任するともに、文化功労者に選ばれ、九十二歳のときには文化勲章を受章しています。

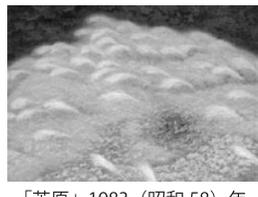
また「旅の画家」と呼ばれるほど各地を旅行した人でした。江戸時代後期の浮世絵師・歌川広重にあこがれ、若い頃は東海道を歩いて取材。ついには「昭和東海道五十三次」(一九三二年)五十八点を描いています。

この展覧会では、旅を愛し、数多くの心温まる作品を残した池田遥郵の魅力、倉敷市立美術館所蔵の名作を中心に鑑賞できます。



「森の唄」1954(昭和29)年

◆池田遥郵は、石本先生が京都絵専に在学中に助教だった方で、先生にとってもゆかりの深い人物です。「面白い先生だった」と話しておられました。



「芒原」1983(昭和58)年

笠岡市立竹喬美術館

《特別展》開館35周年記念

「国展創立前夜

〜大正前期の京都の日本画〜

一九一八年(大正七年)に日本画家の小野竹喬、土田麦、村上華岳、野長瀬晩花、榊原紫峰の五名の京都の新進気鋭の画家達により、「創作の自由を尊重するを持って第一義となす」の理念のもとに「国画創作協会」が創設されました。この展覧会では、その五人の巨匠をはじめとする大正前期の京都画壇の作品をご覧いただけます。石本先生が京都へ行くずっと以前、どのような画家たちによって京都画壇が支えられていたのか注目です。



土田麦「髪」1911年



小野竹喬「南国」1911年

●やかげ郷土美術館&矢掛町内散策

江戸時代に宿場町として栄えた矢掛は、いまでも三百年以上変わらない街並みが残っています。この街に建つやかげ郷土美術館では、田中塊堂(書家)や佐藤一章(洋画家)をはじめとする郷土ゆかりの作家作品を鑑賞できます。

サポーター募集

「できること」を「できるとき」に「できようです」

広報 美化活動

展示替え 創作活動

研修旅行

活動を「楽しんで」いただける方、お待ちしております。



牡丹の植え付け



バックヤード清掃